

学会ニュース

目次

・ 本年度学会費収入の状況と会費納入のお願い	1
・ 第29回大会について	1
・ 札幌からモンペリエへ—18世紀学会の日韓交流—	高橋 博巳2
・ ケベックの思い出		
— 二〇〇六年度国際18世紀学会若手研究者セミナーに参加して		
	王寺 賢太3
・ 研究会のお知らせ	長尾 伸一7
・ 事務局より	8

本年度学会費収入の状況と会費納入のお願い

ここ数年、18世紀学会会費の納付率が著しく落ち込んで来ております。ここ数年で会員数は微増を続けており、現在は421名の会員の方がおられます。それに対して、新しい年度順に会費収入を並べると、2005年度1,547,000円、2004年度2,485,000円（この年度は会費未納の方に数年分の未納分を払って頂きましたのでたまたま収入が増えています）、2003年度2,020,000円、2002年度2,610,000円となります。

本年度は12月8日の時点で、会員数421名のうち、268名の方々が今年度分を納入済です。未納のかたが153名おられます。現在のところ、268かけ5000円で134万円しかまだ会費収入がない状態です。ちなみにかなり会費納入が悪かった昨年でさえ、最終的に154万7千円でした。

学会の事務局運営も可能な限りスリム化を心掛けて参りました。しかし、このままでは、大会開催、年報発行、諸外国の18世紀関係の学会との積極的な交流などの学会の円滑な運営に大きな支障をきたすことが考えられます。学会事務局といたしましては、会員の皆様に学会費に相応するだけの学会運営を今後も続けていくのが最重要であることは常に肝に銘じていることです。そのうえで、会員の皆様にもどうか会費納入のこの憂慮すべき状況についてご理解いただきたく存じます。

まだ会費をおさめられていない方は、うっかりお忘れのかたが殆どであると思います。未納の方には、今回の学会ニュースの発送にあわせて会費納入のための振り込み用紙と改めての会費納入のお願いを同封させて頂きました。上記の現状をご理解の上、何卒どうか宜しく会費納付をお願いいたします。

第29回大会について

来年度の大会は、2007年6月16日（土）、17日（日）に、東京工芸大学（東中野）で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、平山敬二会員です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。

共通論題：「『百科全書』共同研究の新地平」（仮題）（コーディネーターおよび司会は逸見龍生会員、原則として6月17日を当てる予定です）。

自由論題公募（原則として6月16日を当てる予定です）

第29回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファイル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方）を付けて、3月13日（火）までに学会事務局までお申し込みください（メールでも結構です）。発表者の待ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、待ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいますようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

札幌からモンペリエへ—18世紀学会の日韓交流—

高橋 博巳

4年前、手探りで始めた韓国18世紀学会との交流は年とともに深まり、いまや非常にいい関係に達しているように思う。大きな一步を踏み出したのは、韓国から鄭珉漢陽大学校教授を招いて開かれた2002年の札幌大会（共通論題「東アジアと啓蒙」）からである。このときは渡辺浩氏の参加も得て、刺激的な発表に札幌大学の教室が静かな興奮に包まれたのを、覚えていらっしゃる方も多いだろう。会場での通訳ならびに論文の翻訳を担当した金英娥さんともども、準備と後始末には寺田元一会員が尽瘁された。余談ながら鄭さんはその後、漢文の啓蒙的な著述が韓国の読書界の支持を得て、著書が上梓されるたびに人文書ベストセラーの上位にランクされているという。私もソウルの教保文庫で、著書が平積みされているのを何度も目撃した。私はその大半を恵与される栄に浴しているが、漢文の引用以外の地の文を読むことができないのが遺憾である。とまれ2002年はこうして、サッカーファンには日韓共催のワールドカップの年として、18世紀学会にとっては日韓連携の最初の年として記念されるだろう。

機が熟したというべきか、ほぼ時を同じくして水田洋・長尾伸一両会員が2003年の韓国学会でそれぞれ発表され、歓迎を受けたのも特筆される。

その後、2003年のUCLAにおける国際大会では韓国学会と共催で "The Enlightenment and East Asia" をテーマにセッションを行った。司会の長尾会員の好采配のもと、韓国から鄭さんのほかに鄭正浩教授、日本から安藤隆穂会員と私がそれぞれ発表した。会場の反響こそさほどではなかったものの、たとえば南大路振一先生の「学会ニュース 第43号を読んで」（本「学会ニュース」第44号、2003年12月）では、日本の18世紀の儒者の思想がヘルダーの思想と共鳴することをご教示いただき、これは予想すらできなかったことで感激した。つい先日の日文研の研究集会でも、山東大学の牛林杰教授から滝鶴台や野村東皐らの思想に共感を寄せられたのと並んで、18世紀は私の狭い料簡を越えて世界中がつながっていたのではないかと思うようになった。鄭さんとは朝鮮通信使関連資料を交換して、それぞれ論文一篇を執筆した。

こうして昨2005年3月には韓国から宋載邵・鄭・沈慶昊三先生を招いて、名古屋大学で総長経費による「東アジア『18世紀学』の拠点形成」研究会を催し、その縁で二ヶ月後の5月に高橋が韓国18世紀学会の春季大会に参加することになった。大会午後のシンポジウムは1763～4年の朝鮮通信使が取り上げられ、私は3月の宋先生の「松穆館李彦?の日本紀行詩」の後を受けて、日本側に豊富に残されている資料を使って「李彦?の横顔」と題して発表した。用意した原稿からしばしば逸脱する私の発表を当意即妙に通訳してくださったの

は、当時漢陽大学校大学院に留学中だった大川大輔氏である。わずか三日間のソウル滞在だったにもかかわらず、宋・鄭両教授の配慮で充実した毎日を過ごし、最終日に訪れた潤松美術館では趙熙龍を「発見」というオマケ(?)まで付いていた。爾来いくつかの偶然が重なって、いまや趙熙龍研究は私の主要テーマのひとつとなりつつある。

同年の秋の大会には、長尾会員が "18th-Century English Newtonianism and Japanese Natural Philosophers in Late Edo Period" を発表したのに、私も学会から派遣されて同行した。広島大会の講演依頼と、来年のモンペリエ大会の相談をするためである。春のソウルも素晴らしかったが、秋もまた天高く空は澄み、リウム美術館や潤松美術館で時が経つのを忘れた。特に後者は春秋二回、しかも短期間の開館であるにもかかわらず、幸いにして両方とも見ることができたのは、ひとえに鄭・権寧弼両教授のお陰である。

こうして今年度、広島大学で行われた大会では、韓国18世紀学会会長の金正姫先生をお招きし、 "Laughter and Mirth in the British Gentlemen's Manners in the Eighteenth Century" のタイトルで特別講演が行われた。そのあと懇親会まで金先生と会員諸氏のあいだで活発な議論が交わされたのは記憶に新しいところである。また共通論題で「朝鮮時代の礼学と礼楽思想」を発表された韓国嶺南大学校の閔周植先生は、先述の権先生ともども、浜下昌宏・青木孝夫両会員方が大変な努力で継続されている日韓美学研究会の主要メンバーでもあって、私も数回参加させていただいていたお陰で、韓国文化に冬ソナ経由でなく接近できる道が開かれていたのは、いま思い返してしみじみありがたいことに思うのであるが、その一端はすでに本「学会ニュース」第46号(2004年10月)で紹介したことがある。

その後、高橋が別の用向きで訪韓した今年9月にも、金会長はじめ、事務局を預かるChun先生、それに1年間の米国滞在を終えたばかりの鄭さんらと韓国料理のテーブルを囲んで、モンペリエ大会の共同セッションについて打ち合わせを行った。ことに韓国学会は熱心でその時点で8人の申し込みがあり、当初1テーブルで考えていたセッションを、東・西洋の2テーブルで行う方向で現在検討している。東アジアの啓蒙研究を携えて啓蒙の本場に乗り込むのも一興ではなかろうか？

そうした準備も兼ねて、来年早々の1月6日には名古屋大学を会場に、北京大学の孟華先生と渡辺浩会員とで研究会を開催する予定である。テーマは孟先生が「ヴォルテールと孔子」、渡辺先生が「聖人は幸福か？」で、いずれも刺激的な話題を提供していただけるものと期待されるので、広く会員の皆様にご参加いただき、東アジアの啓蒙に光が当たるさまを目の当たりにする機会を逃されぬようお勧めしたい。

最後に、こうした活動を終始暖かく見守るばかりでなく、積極的に支えてくださった歴代会学事務局と会員の皆様に心より御礼を申し上げる次第である。

ケベックの思い出 ―― 二〇〇六年度国際18世紀学会若手研究者セミナーに参加して

王寺 賢太

二〇〇六年度の国際18世紀学会主催の若手研究者セミナーは、九月十一日から十五日までの五日間、まずカナダのケベック市で、ついでトロワ・リヴィエール市に場所を移して開催された。ザールブリュッケン大学のハンス-ユルゲン・リュエゼブリック Hans-Jürgen Lüsebrink とケベック大学トロワ・リヴィエール校のマルク-アンドレ・ベルニエ Marc-André Bernier の二人の開催責任者から示されたセミナーの主題は「歴史と啓蒙」。サブタイトルとして「古代を再創出する、新世界を想像する、革命を思考する」という三つのトピックが与えられていた。この主催者側からの呼びかけに応えたセミナーの参加者はカナダ、アメリカ合州国、フランス、イギリス、オランダ、フィンランド、そして日本の各大学に籍を置いている若手研究者十五人。男女の内訳はそれぞれ七人、八人とやや女性優位の割合となっている。セミナー開催の五日間、それぞれ一時間強の時間のなかで、開催責任者の二人を含め参加者のひとりひとりが自身の研究について英語ないしは仏語で発表し、それについて参加者総勢で議論するという、きわめて密度の濃い催しであった。

と、書き始めてみたが、まずは若干の但し書きをつけておくことが必要ようだ。とい

うのも、そもそもこの「若手研究者セミナー」の「若手」というのが問題含みのものなので、応募要項によれば、二〇〇〇年以降に博士号を取得した、あるいはそれと同等と見なされる四十歳以下の研究者というのが参加資格であったはずだが、実際のところ、参加者のなかには、私自身を含めて未だ博士論文を準備中の研究者も五人ほど見受けられたし、合州国の18世紀学会にはこの「若手」という称号(?)の妥当性に懐疑を示すむきもあるらしく、現に国際18世紀学会のホームページに公開されているプログラムにも、レジュメ集にも、「若手研究者セミナー」というタイトルは記されていない。今回のセミナーに限って言えば、参加者の選択は、年齢の制限を尊重した上で、応募者の書類を審査した開催責任者の二人の裁量にかなりの部分委ねられていたように思われるので、この点については今後の日本からの応募にあたってなにかの参考にしていただければ幸いです。

「歴史と啓蒙」というセミナーの主題については、それが必ずしも十八世紀における歴史叙述・歴史認識と啓蒙の哲学の関係に焦点を当てるものではなく、むしろ哲学、政治言説、政治経済学、文学などさまざまな分野における、歴史的遺産や意匠の用法をめぐる、十八世紀における歴史意識ないし歴史的な時間性の把握を問題にするものであったことは付言しておこう。そこでとりわけ焦点化されていたのが、単にギリシア・ラテンの古典古代のみならず、近世のヨーロッパないしアジア・アメリカの諸国民の起源としての「古代」でもあったことは、以下に示すセミナーのプログラムを見ても理解されるだろう。

2006年国際18世紀学会若手研究者セミナー「歴史と啓蒙」プログラム

「古代を再創造する」

- ・第一部：十八世紀と古代人の共同体
- トリスタン・コワニャール Tristan Coignard 『ヴィーラントとルソーにおける共和主義の理念』
- ニコル・ホレイシNicole Horejsi 『歴史を無から創造する：シャーロット・レノックス『女キホーテ』における女性の古典的伝統の探求』
- ・第二部：起源としてのギリシャ
- アヴィ・リフシツAvi Lifschitz 『啓蒙期における言語と文化についてのエピクロス主義的歴史の復活』
- ルイザ・シェアLouisa Shea 『サロンのディオゲネス：啓蒙期におけるキュニコス主義の再創造』
- ・第三部：スコットランド啓蒙
- アレクサンドラ・イアールAlexandra Hyard 『デュガルド・ステュワートにおける歴史学と経済学』
- オイリ・プルキネンOili Pulkkinen 『スコットランド啓蒙における古典的教養とステーツマンシップ』
- ・第四部：国民的古代
- アリシア・モントーヤAlicia Montoya 『アマデイスからアマデイスへ：中世文学を前にした古代派と近代派 1684-1751』
- クリスティーナ・コンタンドリオプーロス Christina Contandriopoulos 『ジャック-アントワーヌ・デュロール (1755-1835) : 古代の信仰および建築と都市の起源の解釈者』

「新世界を想像する」

- ハンス-ユルゲン・リュエゼブリンク 『問題提起』
- 王寺賢太 『両インドに文明化の過程は存在するか?—『両インド史』におけるインド、中国、メキシコ、ペルーの表象について』
- デイヴィッド・スレイド David Slade 『内からの想像：アーカイヴ、歴史、そしてイベロアメリカにおける啓蒙の言説』
- ペギー・デイヴィス Peggy Davis 『アメリカにおける古代の再興：イメージにおけるアメリカニズム研究のためのいくつかの提言』

「革命／大転換を考える」

- マルク-アンドレ・ベルニエ 『問題提起』

- レミ・デュティエユ Rémy Duthille 『一七八九年に一六八八年を記念する：革命協会 Revolution Societyの演説のフランスとイギリスにおける受容について』

アンヌ・モレル-ダルヤニ Anne Morel-Daryani 『フランス革命期のユートピア物語（1789-1804）：歴史への新たな関係』

マーク・レルナー Marc Lerner 『革命期におけるウィリアム・テルの物語の共和主義的な象徴としての諸用法について』

イアン・マクレガー Ian Macgregor 『古典的な夢から近代の悪夢へ：啓蒙思想における古代の革命』

私自身の発表は、ギヨーム-トマ・レナルの『両インド史』について、そこで提示されるヨーロッパの「文明化」と両インドの「文明化」が、ともにキリスト教的「普遍史」の解体に寄与していることを指摘した上で、インド・中国・メキシコ・ペルーの「古代」の表象が版を追ってシステムティックに変化し、両インドの「文明化」のもたらした帰結についての批判・懐疑を示すようになること、さらにその変化が、中世以来のヨーロッパの「文明化」が担う政治経済学的な合理性と、それに相関する「近代」における政治的自由の条件についてのレナル／ディドロの考察と相関することを示すものだった。ちょうどセミナーの中、「古代」の問題系から「新世界」、「革命」の問題系に移る折り返し点にあって、さまざまな方向に開かれた議論ができたのは、私にとって本当に幸運なめぐりあわせだった。ここではその私の関心に即して、印象に残った発表を紹介し、セミナーでの討議が明らかにした問題系のいくつかを紹介しておくことにしよう。

まず「古代」の問題系の焦点化にともなって、ともすればいささか通俗的に、文化上・政治上の「新旧論争」の時代として十八世紀を捉える傾向の発表が散見されるなかで、当時のイギリス、フランス、ドイツの言語起源論にエピクロス主義的な言語・文化の生成論の復活を認め、それがキリスト教的な創造神話への懐疑・拒絶を含意していることを指摘したアヴィ・リフシツツの発表は、啓蒙期における歴史観・時間意識の問題と「世俗化」の過程の関係についての考察が欠如しがちだったこのセミナーにおいて貴重な介入であったように思われる。またアマデイス・デ・ガウラの中世騎士道物語が十八世紀においていわゆる「近代派」において積極的に受容され、ある種の「美学化」をこうむりながら変容されて行く過程を示したアリシア・モントーヤの発表や、さらには十八世紀後半から十九世紀初頭にかけてのパリの都市の起源神話の変遷を追いながら、ゲルマニズム／ロマニズム論争、ケルト起源説の登場、さらには地質学調査による「神話的」起源の破碎までを実にエネルギーに語ったクリスティーナ・コンタンドリオプーロスの発表も、特に十八世紀における「近代」と「国民的古代」すなわち「中世」が取り持つ決して単純ではない関係を明らかにした点で、きわめて刺激的なものだった。これら一連の発表は、「啓蒙」における歴史的時間性の統一の崩壊と複数化の過程の一面を示すものだったと言えるだろう。

他方、歴史家クラヴィエーロ Cravillero に即して、十八世紀末のメキシコのクリオーショが、新大陸発見以前の古代帝国についての考古学的な知識にもとづいて、「ナショナルな」アーカイヴや歴史叙述の構築を志向したことを語ったデイヴィッド・スレイドの発表や、自然法学と古典的共和主義の言説が政治的に対立した十八世紀のスイスで、共和主義的言説がここでもまた中世的起源神話としてのウィリアム・テルの物語を介して流布されたことを示したマーク・レルナーの発表は、イギリス、フランス、ドイツといった西欧を中心にして思考されがちな「啓蒙」の問題系を、空間的な視野を広げて、その周縁においても、あるいは西欧とその周縁の間関係においても、その相同性と差異性の双方を視野に入れて検討する必要があることを示唆するものだった。

さらにまた、一七八九年のプライスの「革命協会」とフランスの議会の相互的な受容を追跡しながら、イギリスの「ラディカル」の政治言説がフランスの大革命の過程でのりこえられて行く過程を描き出したレミ・デュティエユの発表は、プライスのアメリカ合州国独立支持の言説がフランスにおける一七八〇年代の政治言説の急進化に与えた大きなインパクトを考えに入れるときわめて興味深い後日談と言えるものであったし、革命期に大量

に出現するユートピア物語を総覧するアンヌ・モレル-ダルヤニの発表もまた、そこに現実の歴史的過程の加速に対して、歴史の起源と目的を確定しようとする不安の症候を垣間見せて、十八世紀的な「歴史」の時代から十九世紀的な「進歩」の時代への移行を示唆してくれた。イアン・マクレガーが語ったような、古典的な循環的歴史観のなかで把握された、ある種の破綻としての「レヴォリューション」から、歴史的なタブラ・ラサを介した政治的な構築を志向する近代的な「レヴォリューション」への転換というシエマには一定の留保が必要であるにしても、「啓蒙」のもたらした歴史的時間性の破裂が、「革命」を介して再組織化されるにいたることを指摘したこれら一連の介入は、あらためて「啓蒙」と「革命」の関係の再考を促す重要な視点を提供してくれたように思う。

むろん、ここで紹介した発表のいくつかは、あくまでも私自身の関心をひきつけたものにすぎないし、その他にも興味深い発表をいくつも聞くことができたことは言うまでもない。そもそもこのセミナーの最大の魅力は、互いに名前も知らなかった若い研究者がひとつの主題をめぐって集い、それぞれの進行中の研究の成果について五日間の時間をかけて話しあうというところにあった。言わばそこで議論が成立するということが自体が不思議な事態でもあるのに、わたしたち参加者はみな、日を重ね、それぞれに忌憚のない意見を交換しながら、互いに親しさを増すにつれ、セミナーの活況に自分たち自身で驚きあうようになっていたのである。傍目にはなんの変哲もないセミナーのプログラムも、その場に参加することができた私にとっては、発表者一人一人の表情や身振り、そこで展開された議論のあれこれの鮮明な記憶を呼びおこさずにはいないものなのだ。

もちろん、五日間の限られた時間で、開催責任者のものも含めれば十七本の発表を次々に聞いては議論して行くというハードスケジュールだったから、さすがの「若手」研究者たちも最終日には疲労困憊の様子ではあったのだが、このセミナーの論文集の出版を決め、出版委員を選び、さらには来年のモンペリエでの国際18世紀学会に今回の参加者みなで再度ワークショップを開いて議論を続けることを決めた後も、翌日に迫ったそれぞれの出版を前にして互いに去りがたく、長い夕食を終えて、小さなトロワ・リヴィエールの街で居心地の良いバーをあちこちと探しまわった挙げ句、結局深夜になって開催責任者のベルニエ氏の自宅に大挙してなだれ込み、みんなで延々とおしゃべりを続けたことなどが懐かしく思い出される。そこには、十八世紀をめぐる研究の話はもとより、職業上の不安や期待、日常生活のさまざまな心配事と研究の兼ね合いなど、「若手」研究者ならではの関心や懸念が気楽に話題にのぼる和やかな空間があった。—— 実を言うと、私自身は、友人たちからさまざまな教えや励ましを受けとりながら、もはや自分は決して若くはないのだ、という感情に次第に強くとらわれるようになっていたのだが。

リュウゼブリンク氏の開会の言葉によれば、このセミナーは、本来一九八九年にロバート・ダントンが提唱して、当時の「東側」の諸国と「西側」の諸国の若手研究者を集めて開催された『East and West Seminar』を起源に持ち、その後一般に十八世紀を対象とする若手研究者を集めるセミナーとして継続されてきた催しであるらしい。決して華々しくはないけれども、参加者にとっても、そしておそらくは世界の十八世紀研究にとっても長期的にはきわめて実りの多いこのような催しを開催されてきた、国際18世紀学会・日本18世紀学会の関係者の方々の努力に対しては、大きな尊敬と感謝の気持ちをお伝えしておきたい。特に今回、十八世紀の痕跡を生々しく留めたケベックでの開催に際して、現地での受け入れから組織までのすべてを担当するとともに、十八世紀における古代と近代の対比についてのブリリアントな報告をしてくれたマルク-アンドレ・ベルニエ、それから穏和で視野の広い議論でセミナーを導いてくれたハンス-ユルゲン・リュウゼブリンク両氏にはここでとりわけ心からの感謝を表明しておかなくてはならないだろう。今後ともこの催しが末永く継続し、さまざまな場所で十八世紀に関心を抱く研究者たちの間に新たな関係を創り出して行くことを期待し、同時に日本のより若い世代の研究者たちが、この催しに積極的に参加して、十八世紀と十八世紀研究のさまざまなあり方に触れる機会を持つことを願いつつ、この簡潔な報告を締めくくらせていただくことにしたい。

研究会のお知らせ

長尾 伸一

名古屋地区ではここ数年交流を続けてきた日韓の18世紀学会を中心として、東アジアでの学会間交流を促進するために、高橋博己会員を代表者とした科研プロジェクト「啓蒙と東アジア」を推進しています。このたびその一環として、2007年初頭に二人の中、私の代表的な研究者を招聘し、各地で研究会を開催します。自由にご参加ください。

1 中国18世紀学会の孟華さんを迎えて

1月はじめには従来から交流のある中国の仏文学者孟華さんにきていただき、啓蒙における東アジアの意味を検討します。

日時：2007年1月6日（土）1:30～5:30 P.M.

場所：名古屋大学経済学部第一会議室（地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車、1番出口を出て向かって右手前方の建物、二階）

講演者・題目：

孟華（北京大学比較文学文化研究所教授）
「ヴォルテールと孔子」

渡辺浩（東京大学法学部教授）
「聖人は幸福か？」

終了後懇親会を予定

*問い合わせ先：高橋博己（金城学院大学）
電話：052-798-4859（研究室直通）
E-mail：htaka@kinjo-u.ac.jp

2 百科全書研究のレカーツィオミさんを迎えて

2月下旬から3月はじめにかけて、百科全書研究の第一人者であるレカーツィオミ Leca-Tsiomisさん（パリ第十大学）を迎えて、百科全書研究の現在を検討します。現時点では以下のような研究会、講演会が予定されています。予定の変更がありえますので、随時ホームページでご確認ください。

(1)講演会

日時：2月26日（月）15時

場所：慶應義塾大学

題目：「『百科全書』研究の現在」、終了後懇親会を予定。

(2)研究会

日時：2月27日(火)15時

場所：慶應義塾大学

テーマ：「『百科全書』メタデータ抽出の諸問題」

(3)講演会

日時：3月2日午後

場所：京都大学人文科学研究所（人文研「啓蒙の運命」班による企画）
（文責 長尾伸一）

この記事に関する問い合わせ先:

〒464-8601

名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科

長尾伸一

電話：052-789-2380

E-mail：nagao@nagoya-u.jp

事務局より

名簿について

2007年は名簿作成の年度にあたります。前回の学会ニュースとともにお送りしたカードのデータに間違いがないかどうか、まだご確認ください。至急事務局にご連絡をお願いいたします。日本18世紀学会の名簿はそのまま国際18世紀学会の名簿 **International directory of eighteenth-century studies** とも連動することが求められておりますので、日本語表記およびローマ字表記の両方をご確認ください。また、間違いがない場合にも、その旨を事務局にご連絡ください。

なお、事務局へのご連絡は

・ e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

・ fax: 03-5841-8958

・ 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

美学芸術学研究室

のいずれかをお願いいたします。

幹事会メンバー：青木孝夫、安藤隆穂、安西信一（常任幹事・年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、木村三郎（常任幹事）、小穴晶子（常任幹事）、高橋博巳（東アジア交流担当）、寺田元一（国際幹事）、長尾伸一（東アジア交流担当）、馬場朗（常任幹事）、堀田誠三、増田真、森村敏己（常任幹事）

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第52号 2006年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

fax: 03-5841-8958

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>